

福岡

地域福祉活動職員の

まなこ

地域福祉活動推進のために

No. 57

2007年3月発行 福岡県地域福祉活動職員連絡会

★特集 研修事業

福岡県地域福祉活動職員連絡会では、2006年度の研修事業として、「社協の仕事を考える研修会」「社協の実習をみんなで考える研修会」「社協の広報をみんなで考える研修会」「当事者の課題から地域の課題へという事をホームレス支援の体験を通してみんなで考える研修会」を行いました。

1 社協の仕事を考える研修会

「声なき声に耳を傾けて」「下から上への運動体」・・・



▼戦後、社会福祉の再組織化を推し進める中で、GHQの出した「公私責任分離論」により、行政責任と民間を分ける考え方が登場します。民間の社会福祉が必要になる一方、民間に資金も人材ないというところで、行政により（上から）社協はつくられることになりました。

▼「主体性」：「民主化」があります。低限度の生活が保障されました。それは国民の権利でもありました。でも地域には取り残されている課題がたくさんあるなら、それは無権利の状態。ワーカーがその無権利に寄り添いつつ権利の拡大に取り組みめるかが問われる、ということ。

▼「主体性」：財政や経済の問題によって左右される社会保障。しかし社会事業は生存権の問題であって、その人を全面的に擁護していく時、財政は抜きにして必要だという主張ができるかどうか、ということ。

▼「民主化」：「声なき声」をきちんと発していけるような、違いが認められるような社会、「下からの組織化」というものが問われる、ということ。

▼これらの土台を社協も背負いつつ、社協が抱えている課題として、「民間性の問題」「地域の問題」があります。

(1) 社協の歴史

―時代の歴史の中で―

（中山陽一さん／筑後市社協）

戦後、日本の民間福祉を推進するために設置されてきた社協。社協の歴史や社協の役割についてお話をさせていただきます。以下、ポイントを紹介します。

9月2日（土）、筑後市総合福祉センターを会場に、地職連研修事業「社協の仕事を考える研修会」を行いました。約50人の参加があり、「社協とは」「地域福祉活動とは」など、基礎的なことではありますが、きちんと押さえていたいことを学習しました。このページで、まとめとして報告します。

（筑後市社協 卜部善行）

ことになりました。

▼しかし、社協は営利事業者やNPO法人と競合する時代に入りつつあります。「なぜ社協に補助金を出すのか、その意義はあるのか」と問われる時代でもあります。だから、「自分たちは必要なんだ」と、存在証明をしなければなりません。

▼今国は「小さな政府」を目指していますが、これは「社会的排除」と連動します。ニート、引きこもり、ホームレス…。今後、地域福祉活動のニーズは高まってくるのが想定されます。

▼また、社会制度の弱体は、社会制度を使えない人の増大をもたらします。社会制度の代わりに助け合い(代替的ではあるが)としての地域福祉活動が必要となります。

▼「小さな政府」を目指す今、医療環境の分野も含め、地域のニーズは多様化 拡大することが予想されます。ですが、社会的なニーズに対応することは「社協の存在意義」を示すことにもなる。これは、行政が社協に望むことでもあります。

▼ただし、地域福祉活動を政府 行政の補充、代替に終わらせたり、政府行政に任せるための先駆的活動に終わらせることにならないよう注意は

必要です。

▼そのためには、「知っている人だから助ける」ではなく「知らない人でも助けよう」というような意識の獲得が重要で、一人ひとりがいきいきと暮らせるようにするための活動を、「住民がやるから意味がある」ということを示すことも大事です。

▼今後、自発的で普遍的な意識を持つボランティアと地域の助け合い活動がうまく連動し、新しい協働社会の構築が求められます。それには、社協がいきいきとした自発性を持ち、新しい地域づくりを進められるかが問われることになります。

★まとめ…のつもりで

今回の研修では、地域福祉活動をすすめる上での、私たちの動機付けになれば、という思いをもって実施しました。それには、地域福祉活動の必要性を感じたり、社協はどんな目的を持った組織なのかを知ることは重要だと思えます。

今回のグループ討議では、「ボランティア」「小地域福祉活動」「福祉教育」をなぜ社協が行うのか、ということを通して合っていたきました。私の思いとしては、これらは社協の目的を達成するための方法の一つだと思っています。また、その他の社協活動も同様です。今の時代、社会情勢や時代背景など、今の時代

にあった活動ということ、多くの社協が取り組んでいるのかもしれない。

社協活動の大前提として、「地域にある課題をどう解決するのか」ということがあると、思います。「声なき声に耳を傾けて」「下から上への運動体」などのような言葉が今回の研修で出てきました。この言葉を胸に、社協活動に取り組みたいと思います。

★参加者の感想

／下川喜美恵さん(筑後市社協)

社協って何してるどころ?と聞かれたとき、自分自身分かっていないよう分かっていないことが多く、恥ずかしながらうまく説明ができないことは多々あります。今回の研修では、社協の本質、自分たちの役割などに立ち返り、自分の言葉で語り、考えることができる研修だったと感じます。

「違いが認められる社会、声が発せられる社会かどうか、取り残された権利についてワーカーがどう捉えるかが重要である」との話や、「何でこの活動をしているのか?福祉って何だろう?という本質を押さえておく必要がある」という話は印象的で、普段の自分はどういうスタンスで地域に関わっているのだろうか?と改めて振り返ることができました。

目の前の業務(現象)をただただ遂行し

ていたり、また、そればかりに捉われてしまったりすることによって、ワーカー自身が声にならない声を聞き落とし、権利を取り残したままにしてしまうことにもつながってしまうという危険性を感じました。

取り残された権利があれば拾い上げて、地域に投げかけ、権利を広げていけるような姿勢を常に持ちながら地域の福祉課題に真摯に向かい合っていくことが必要であり、また、課題の本質活動の本質、そしてそれが持つ目的や理想を見失わないようにして地域と向き合っていきたいと改めて思いました。

そして、その理想や目的を自分の思いとして地域に向けて伝えていけるようになるためにも、多くの課題と出会い、多くの住民の思いを知ること、また、発せずにいる声や取り残された権利に視点を置いて、活動を進めることが欠かせないことではないかな…と感じています。



▼「民間性」の問題：行政に頼らない組織体として、行政に対して批判的、あるいは批判的協力的に関係を持ちえるか。また、地域住民に問題提起やアピールを行い、政策転換への運動を展開しえる、ということ。

▼「地域」の問題：地域住民の日常生活圏域が市町村レベルを超える中で地域をどう捉えるのか、ということ。もちろん、地域という土台をベースに下から上に社会をつくり変えていくような視点が問われます。

▼改めて社協とは何か。社協をつくったとされる牧賢一氏は、「地域社会で何が早急に解決しなければならぬ活動であるかを見出し、その解決方策を考えるところ」であり、「福祉向上のための運動体」としています。いわば「福祉のまちづくり」と言えるかもしれませんが。

▼社協は福祉に欠ける状態を克服していく、そのためには住民を主体にして組織化を図りながら、下から上に社会をつくり変えていくような組織だと言えらると思います。

▼岡村重夫氏は、「生活上の課題が発生しているのは地域社会なので、解決の努力も地域社会に用意されなければならぬ。対象者を取り巻く地域社会そのものを対象とする社会福祉

の方法がなくてはならない」としています。また予防的な社会福祉の展開も地域福祉の基本としています。

▼最後にこれからの社協を考えた時、個人のケアに強いコミュニティケアと、地域全体を対象とするコミュニティワークが手をつなぎながら、地域福祉理論を全体化する、そんな社協を高めていくことが、必要ではないかと、思っています。

(2) グループに分かれて語り合おう

「ボランティア」を考える

(進行 鈴木幸則さん／宮若市社協)

「ボランティア」「小地域福祉活動」「福祉教育」「0〜1年目の新任職員のために」の4つのグループで討議しました。ここでは「ボランティア」の話し合いのみ紹介します。各参加者から現在の悩みや課題を出し合ったところ、特に多かった3点について議論されました。

① ボランティア連絡協議会について

ボラ連を組織化するメリットが見出せない、各団体間の共同事業で参加者に負担感が現われている、団体の構成員によつて集まることのできる時間帯に相違があるなどの課題が挙げられました。ボラ連の存在意義については、「ボラ連は、行政 議会 社協に対しての要望

活動と共同事業を行う運動体であるという共通認識をつくるのが大事」という意見が出ました。

② 生涯学習ボランティア（行政主導のボランティアセンター）との相違について

市町村によっては行政と社協のボランティアセンターが並存しており、行政主導のボランティアは比較的新しい活気のある展開をしており、その予算規模や参加人数規模で社協のそれを大きく上回っています。

このような状況で、社協のボランティアセンターの存在意義とは何かを悩んでいる社協が少なくありませんでした。

③ 新しいボランティアの発掘について

今注目されている団塊の世代の活動への取り込みや、若い世代のボランティア活動への定着化などの悩みや事例も出されました。

根本的な問題として、ただボランティアを集めればよいというわけではなく、地域の中の福祉課題を発掘するための取り組みが問われるのではないのでしょうか。

☆「社協だからボランティアとかかわりを持つのは当然だ、という考え方はなく、ボランティアも一住民として捉えて、多様な関係を持ちながら、型枠にあるとはまらない活動と、縦割りに左右されることがなく、支配的関係ではなく対等

な関係を持って接しながら、幅広い住民活動を育てていくことが大切」ということを確認した話し合いでした。

(3) まとめー社協はなぜ地域福祉

活動をするのかー

(小野達也さん／大阪府立大学)
社協の歴史、グループ討議などを受け、一日のまとめとして、お話をさせていただきました。
以下、箇条書きで紹介いたします。



▲小野達也先生

▼今の社会福祉 制度などの「現象」と、そもそも社会福祉とは何かという「本質」。差があるのは事実です。「本質」の部分学ぶことが大切です。
▼戦後に生まれた公私分離の原則。けれど、社協は行政から金をもらっています。これは憲法89条に違反しているのですが、1951年制定の社会福祉事業法により社会福祉法人として行政の援助を得ることができ

箇所、佐賀県1箇所、宮崎県1箇所で行われた実習内容が報告されました。

概ね2週間もしくは4週間の事業の参加体験をいかにつまんで説明され、社協職員がどのような配慮をしながら仕事をしていたか、学生諸氏が着目した部分の感想などが報告されました。

いずれの学生も、大学で学ぶことは言葉での説明でしかなく、現場に入ること、分かった部分が多かったという感想を述べられていたようです。

(講義の報告)

松尾誠治郎先生(久留米大学)に、「そもそも社協の実習に何を求めているのか」をテーマに、たくさん資料提供と、実習に対しての考え方を話し頂きました。

実習を終えた学生は、社協がいかに様々な分野や対象者に関わりを持っているのか、組織や仕組みや取り組みが複雑であり、実習期間で分かるうにもなかなか難しいことなどを、確実に体感して帰ってきており、実習に行くことが非常に大きなインパクトを与えるので、実習を大切にしたいということです。

そのためには、社協の忙しさも分かっているけれど、学生を新人ワーカーのように考えてもらい、社協全体の事業のやり方を部署廻しで教えるの

ではなく、「なぜこれをするのか」「何が地域課題なのか」「ワーカーとして考えるべき事やるべき事」を徹底して体験させて欲しいという想い、また、実習期間で関係が終わりではなく、実習が終わっても色々なことを教えて頂ける関係を継続することが、学生を育てること

にとどまらず、社協の将来のワーカーを育てると言うことに繋がる、ひいてはそういうワーカーが育つことで、地域や社協が更に変わっていくということだと発展的に考えられているようでした。

卒業単位や資格取得のためにも、確かに絶対必要条件ではありますが、想いとしてはそれが最重要ではなく、やはり人づくりの大切さを訴えられました。

(実習受入側の報告)

実習受入側の報告としては、大きな自治体の社協と一般的な自治体規模の社協の2つということで、筑後市社協と北九州市社協の受入内容を報告頂きました。

どちらの社協も、実習生の受け入れ内容を説明されましたが、短い実習期間の中に本当に色々な事業や活動や対話の間を盛り込んでおられます。

しかし、実習受入者である私たち自身が、「こんな実習でいいんだろうか?」といったも不安に思っているような感覚は、やはりお持ちのようで、いい実習方法が

あったら逆に教えて欲しいという感じはありました。

(同じ領域でのグループ討議)

二部の前半は、同じ領域で集まり、同じ立場での意見交換がなされましたので、先生方は先生方でお話し頂き、話の内容は把握していません。学生グループには、話の進行のために中に入りましたが、お互いが実習でどのようなことを体験したのか、その時の感想や特に印象に残ったこと等を話しました。

社協職員のグループでは、受け入れた時のプログラムや問題点などが出されたことと思います。

(縦割りグループでの討議)

教員、学生、社協ワーカーを混ぜてのグループで意見交換を進めました。主



には学生の实習での体験をもとに話が進められました。どういった実習を受けさせてもらったのかを、各学生が話した後、グループで話をふくらませたようですが、送り出しのための事前指導の問題や受け入れ側の体制、実習先の先生方の訪問のあり方、受け入れ社協の指導力の問題、学生の資質の問題など、かなりストレートに課題が表出していたようでした。

このような意見は、お互い同じ立場の話し合いでは良く聞かれることですが、同じテーブルで共通理解が出来たというところは、今後の実習を良くしていくために、プラスになったのではないかと考えられます。



2 社協の実習を考える研修会

—社協に実習に来てくれる学生さんに、本当に社協の事を伝えられているのか!?!—

福祉系の大学や専門学校が増え、毎年各社協では地元出身の学生を中心に実習生を受け入れ、受け入れてはいるものの、果たして本当に「社協の仕事」を学生に体験してもらえているのか、よその社協ではどのように受け入れを行っているのか、実習へ送り出す側の学校は、実習に来る学生は果たしてどのような想いで実習に臨み、私たちの社協で何を感じ取っていかようとしているのか。そういうことが曖昧なままに実習が行われているようで、受け入れる側の我々の姿勢について、一度みんなで話し合いを持とうと、10月23日(月)、本研修会が開催されました。

(報告/うきは市社協 國武竜一)



—研修会に入る前に—

研修会に大学からも参加頂くために、各大学のホームページを開きながら、実習担当者もしくは地域福祉論や援助技術演習などを担当されておられる先生方を捜し、次々に電話をして誘いをかけるといふ連絡作業を行いました。そこで色々な情報も得ることが出来ました。簡単に言えば次のようなことで、

- 社協に限らず、実習送り出しに関することは、社会福祉士養成校が共同で協議検討されていること。
- 大学は実習生受け入れをお願いする立場で、なかなか無理が言えないこと。
- 卒論発表会や実習報告会などのお誘いをするけれど、現場の方々はほとんど参加して頂けないこと。

- 卒業させるもしくは資格を取得させるために、実習は必要不可欠なこと。
- 大学によって実習に対しての力の入れ方や考え方に違いや差があること。
- 社協のことをよく分かっている教員が必ずしもいないこと。
- 資格取得に必要な実習時間数が今後大幅に増えること。
- その時に、受け入れ側が拒否もしくは今以上に嫌がられることが懸念されていること。
- 社協側からこのような申し入れがあつたことは今までなく、接点づくりができてありがたいということ。
- 今回の研修のように、年度途中の申し入れでも柔軟に受け入れて下さる大学と、考えが硬くて、前年度から言って貰わなければ来られない、実習担当者ではなく学部長などから、正式に話を通して貰わねば対応できないというような、お役所的な大学もあること。

また、このように社協が呼びかけて、大学側と実習の事を考える研修会があつたかという点、福岡県社協はもろろんのこと全社協や他の都道府県社協でも、市町村社協が実習生受け入れに困惑し課題意識を持っているという認識が薄いもしくは無く、「実習とはどうあるべき」というような研修が行われたことはまずないとのことで、複数の社協と複数の大学

が一緒になって話をするということとは、真新しいものとなりました。

—研修会の内容—

研修会については、報告を聞く時間とディスカッションする時間で構成し、一部では実習終了者4名の実習報告、大学側から社協実習への要望として、久留米大学の松尾誠治郎氏より「そもそも社協の実習に何を求めているのか」という講義、受け入れた側の二つの社協からの報告を受けました。

二部では、言いたいことを言い合うということ、まずは同じ立場同士(教員は教員、学生は学生、社協職員は社協職員)での意見交換をした後、グループをミックスして立場を超えた意見交換を行いました。ただし条件は、大学側からの要望や苦言などを受けて、「そんなに言うならあなたの学校からは実習は受け入れない」というのは無しということ、お互いに対等な立場で建設的に意見を出し合おうということでの討議でした。

(実習終了者の報告)

実習報告は4名の学生 院生にお願いしました。久留米大学、西九州大学、長崎純心大学、九州保健福祉大学と大分県所在地がかたまらないように配慮しての実習報告で、福岡県内の社協が2



3 社協の広報をみんなで考える研修会

—住民との大いなる接点 社協の“広報紙等”は本当に必要なのか！？—

(報告/志摩町社協 加藤 博貴)

12月9日(土)春日市のクローバープラザ506号室を会場に開催。42社協(佐賀、長崎県内社協も含む)60人の参加でした。

研修ドキュメント

24-Twentyty Four-風

俺の名は、福岡ブロック。この物語は、社協の広報をみんなで考える研修会を開催する数ヶ月前から当日までの軌跡を描く。それは数ヶ月前に遡る。

9月23日(土)

10:00

広報研修を担当することになり、各社協において、「社協の広報紙」を出すことと出さないことに何らかの理由があるはず。どのように広報紙を作ったという方法論ではなく、まずは「社協の広報紙はあるの?」ということを考え、また必要なのであれば、どのような広報紙が望ましく、それはどのように作っていくべきなのかを議論した。

まず俺は、一緒に研修を企画する福岡ブロックのメンバーに聞いてみた。

担当者一人で奮闘している人や数名で担当を変えながら行っている人、チェックにおいても職員間でしている社協や広報委員会を設置して、地域住民から意見をいただいている社協まで様々だった。社協だよりの現状や問題点としては、広報を読んでいただけない。紙面のマンネリ化、事後報告広報などみんなに共有する課題となった。

11:00

どうする?研修内容。グループワークは?課題の集約から社協だよりを発行するにあたっての注意点、さらには社協だよりを住民に読んでもらう工夫点を出すのはどうか。いや、社協だよりの必要かどうかをまず確認し、共有すべきだ。様々な意見が述べられる中、コーディネートは誰が、講師は誰に、次々と敵は立ちふさがる。出口の見えない道をさまづつていた。

何分、何時間が経過しただろう、柱の講師としては、行政広報も社協広報と同じ視点であるということと自治体広報担当者、HPに関してはその専門の方をお願いすることに決まり、残る一つをどうするか。

コーディネートや助言者としてもしていただけないだろうか。そもそも社協を広報するということはどういうことか。宣伝のブロック?企業的な戦略意識を中心に話せる方はいないのか。しかし、どうしても福祉の域を超えることができない。というか単に知り合いがない(T)。大学の先生は?その時「学校で福祉情報論を聞いたことがあります」それだあ。

10月19日(木)

19:30

業務も忙しい、お腹も減った。メンバーも極限にきており、なんととしても今

回で決定したいところである。行政広報については、広報紙コンクールを開催している県庁の担当者からご紹介をいただき、福智町役場の長野士郎氏に、HPに関しては、県地職連会長の後輩ということでご紹介いただいた美和大樹氏に。そして、総論や助言者としては、立命館大学教授生田正幸氏に決定した。日程も講師の都合があり、なかなか決められない。場所も志摩町でしたら誰も来ない。春日クローバーは?仕方ない:そうしよう。(この決断が後に部屋代の時間超過分やマイク利用料、冷たい対応等々、やらしい問題になるとは、この時点では予想できなかった。)

12月9日(土)

11:00

準備のために早めに集まった。冷たい応対にも耐え、今日一日が無事終わりますように、、、それが研修会の幕開けで、領収書を作成してないことに気づくホンの数分前でした。 (会長ごめんなさい)

【講義1】

データ収集とその取り組み、そして地域(広域)を巻き込む工夫を

立命館大学教授 生田正幸氏

▼社協の広報活動 情報収集活動をど

〈全体会〉

全体会では、各グループでの話ごどのように進んだのか報告して頂いたのですが、主催者の意図としては、各グループ報告を踏まえた上で、実習モデル的なプログラムを少しでも形作りたかったのですが、実習の問題点の指摘意見が多く、また各社協が行っている取り組みが違ふことから、モデルプログラムのような形はなかなか出来にくいようでした。

また、今回のこの研修は、複数の学校と社協が一緒になって開催したということが意義深く、会場全体に今後、継続してやって欲しいとの要望が強く、そのことを確認しました。



―ぶつちやけ本音トーク―



まじめな研修会のあとは、少しお酒を飲みながら、みんなの前では言えなかったことや、後で思いついた自由な発想をざっくばらんに出し合いました。

中には、就職活動しながら名刺を配っている学生も見受けられましたし、先生方も大学の色んな内情や実習指導担当者の特有の悩み、社協職員は学生諸氏に「がんばらんねー」とエールを送っている姿も見受けられました。

―研修あとがき―

今回の研修は、今までみんなで考えてこなかった「社協の実習」を、一度ちゃんと考えて、ふさわしい実習を提供したいと思開催したのですが、多くの皆さま

んが同じように「実習をどうしよう」と真剣に考えて頂いていたことをとても嬉しく思いました。

実習生とは、2週間 4週間という短い期間の出会いですが、私の所では実習が終わった今も、かなり頻りに連絡を取り合っています。実習で体験したことを、卒論や将来の職業に繋げたいと考える学生も少なくありません。ですから、後々のサポート（卒論支援や就職サポート等）にも関わってあげられることができれば、良い人材は自ずと育つてきてくれるのではないかと思います。

この研修を大学と共同で継続していくという確認が取れましたので、次年度以降もしっかりと実習を提供できるように、お互いに研究し頑張っていきたいものです。

また、全社協をはじめ各都道府県社協や福岡県以外の市町村社協の皆さんにも、課題意識を持って、「実習はどうあるべき」ということを考えて頂かなければならないのではないのでしょうか。だって、実習に来て下さる彼ら彼女たちは、将来的には私たちの仲間となる方々なんですからね！

【研修会の感想】

／西九州大学大学院 土井幸治さん

社協の実習を考える研修会に参加して、現場と学校と学生の間での実習に対する意識（学びの視点など）の違いを改めて感じました。

学生生活の中での実習は、ほんのわずかです。同じ目標を挙げ実習に望んでも、実習を終え、お互いに報告をしてみると内容はばらばらです。個人の視点の違いというには、あまりにも差がある報告の場合も多々あります。

これまで、現場、学校、学生の三者間での打ち合わせがありませんでしたが、これをするかしないかでは実習で得るものも違ったのではないかと思います。もちろん現場の忙しさ、学校での指導の忙しさはあると思います。しかし、実習の目的 達成方法を話し合う時間（機会）というのは、実習期間を削つても行うほどの重要性があると思えました。

私は、実習を終えてから研修会に参加しましたが、実習に向けての三者間の打ち合わせの重要性を感じました。今回、県地職連がこうだった研修の必要性に目を向け、お声かけして下さったことは、大変意義のあることだったと思えます。

今後、よりこういった声が各方面からあがり、現場、学校、学生で連携をとり、よりよい実習（人材育成）および福祉が推進されればと思います。

なる生活情報ネットワークになっていくし、そうであってほしい。

【講義2】

社協HPの目指すもの。ブランド認知+福祉への向上 情報公開ブランド=消費者が感じている価値である。地域住民が考えている社協(またはサービス)の価値

【有限会社ユニット エムエスイー 美和大樹 氏】



有限会社ユニット エムエスイーの美和先生は、日々急速に変わるWEBの世界でHPの捉え方やアクセスマップの方法、検索上位検出術(SEO)等聞きなれない専門用語も多いのですが、社協のホームページを作成中、もしくはネット上で公開している問題を社協

担当者の視点として問題提起し、分かりやすく解決策(現在社協担当者が抱えるWeak Pointを潰していく)をこ

参加者におかれては、費用への関心も高く、金額に関してはまさに上を考

地域住民が何を求めているのか。知りたいニーズは何なのか。社協として伝えたいのは何なのか。

社協職員としての基本スタンスの整理がまずありきで、その上でホームページの費用対効果や十分な活用法などお金

【講義3】

「気づく」「魅せる」「励む」「挑む」 「福智町役場主任主事 長野士郎氏」



福智町役場の長野さんの話はとても興味深く、3人体制という町自体のスタンス、広報は知らせるだけでなく、「聴く」が大事と話され、住民と共有するという

長野流広報術 (つかみが大事。いかに本文を読ませるか。住民ニーズは複雑!?)

○自分の物差しで見えてはいけない。住民にわかりやすい記事にするのが大事。

○気づけるか気づけないかが重要。記事は10聴いて10+2にするぐらいの表現をする。

○表紙は広報の顔。読むか読まないかに関係なく、全戸配布される広報紙いかに手を伸ばして取っていただけ

○最初の見開きが重要。手に取ると最初にするのは、1ページ目を開くこと。

○裏表紙にも気配り。家庭に配られた広報紙は必ずしも表を向いているとは限らない。

○図案率を高くする。紙面のなかで写真や図が多く、文章が少ない。

○写真、タイトル、リード文、見出しがあつて、本文を読ませるのが基本。写真の目線の先に本文があつたり、中央に向くような配置(写真の右向き、左向き)もしている。

○キャプション(写真の説明)をつける。○広報は見開き単位でレイアウトする。

○トーン(色調)を統一する。

う捉えるか、情報をどう考えるかを中心に話されました。

「情報を活用する 利用するために様々な条件整備をしないといけない、情報弱者という存在も見逃してはならない、また、その情報に価値を見出さないと意味がない。

情報という観点で、読んでもらう側その情報を使う側も努力が必要ですし、その存在を前提に支援する体制が不可欠で、その体制作りをするのが社協ではないのか」と語る生田氏。

▼福祉情報の現状として、膨大な処遇記録もデータとして使わない施設もありそれでは何の意味もない。情報Ⅱ知ることの重要性を強調されていました。

▼広報紙で社協の存在を誰に知ってもらいたいのか。エンドユーザーは誰か。知識、技術、意欲を引き出すのは大事なことで一朝一夕にできるものではないがニーズ情報 サービス情報 生活ネットワーク情報を、社協として住民にわかりやすく比較したり、加工したり社協職員で分析してもいいのではないのか。情報ブローカーとして、コーディネーターとして工夫してもらいたいと問題提起されました。

▼全体を通して、大事なキーワードも大変多く、それをどう自分の地域福祉

推進へとつなげるのかは、まさにスキルの問題だと実感しました。

行政情報（国の操作）に振りまわされないためにも、生の、その生活者の視点に立てるのが社協とっていますし、そして住民にそれを理解していただくためにもデータ収集や、地域を巻き込む「社協だより」の工夫が大切に地域福祉活動に連動した取り組みが必要ということ。

また情報操作（言いすぎかもしれないが）を社協がコーディネートできる力量をつけることが今後の社協の生き残りの鍵にもなりますし、非常に重要な分野だと改めて認識しました。

先生の話の中で比較（ランキング）の話もあり、「社協広報紙コンクール」もぜひして欲しいという声も出ています。さらには、グループワークができませんでしたが、グループで社協の広報紙の理想をみんなで組み立てて、紙面づくりをさせて、発表させるやり方なんか面白いかなるのではと思いました。

社協アンケートについて生田語録

- 住民が求める福祉サービスをランキングにしてみては、連絡会として、社会福祉助成なんか取れるのではないかな。
- 最近の地域のこと、身近で起こったことを提供する。
- 広報紙だけでなく、口コミもある。そ

ういう仕掛けをしていますか。

○情報を出せば、情報が入ってくる。

○地域住民が求めているのは、生活を良くするような情報。「ダイエツトが成功しました」「難病が治りました」とよくありますが、みんな自分の生活に照らし合わせている。介護問題等もそうではないか。気がついてもらうために情報を流してみてもどうか。

○自分自身の生活問題に気づく情報。そして利用（改善）できるためにどうしていくのか。

○地元の人に登場してもらおう。ごく普通の人が掲載していく。

○サービスを提供してもらおう人にどんな出てきてもらう。

○住民に記者になってもらう。小学生や中学生にもしてもらっては。記事を直すことを前提にしても、ゼロからするより、はるかに楽になる。

○コマースナルを載せたい、ということですがクーポンとかどうでしょう。社協会員さん（法人、個人経営）の割引券とかどうですか。

○切り抜いて使える。例えば、バスや列車の時刻表等も面白い。そのところを切り抜いて冷蔵庫に張ってもらう。

○書き手を増やす。マンネリして、担当者か煮詰まってしまうときに有効。

意して、いろんな方に記事を書いてもらう。連載、リレー等。

○社協の記事をバラバラにする必要があるのか。正月号なんかは、各社協で協力して有名人と対談なんかもできるのではないかな。また他社協の人が書いてもいいのでは。（わかりやすい制度の問題など）

○文章は慣れです。いっぱい書いていっぱい失敗していく。

○個人情報もありますが似顔絵とかどうですか。

○自分とこの事業所の記事を載せたときは広告料を取ってみたい。

○ホームページも自分で作ってみたらどうですか。ワードでもできますよ。

○ワムネットのメールマガジンですが編集後記を輪番制で書くようになったら職場で評判になった。理事長がみるようになった。そして理事にも書かせようと。そういう風にしていくとその記事が楽しみになってきた。

○技術も大事ですが、何のために発信するのか。なぜ社協が出すのか。もっと熱くなっているのでは。協力者を育てる、増やす、職員間の連携をしっかりして、生活に関する情報の流れを再構築してもらいたい。意識して取り組んでいくと住民に頼りになる地域で、頼りになる社協で、頼りに

何故ならば、この研修会を企画する中で、どの職員にもノウハウが無いからです。

まず研修会を組立てる際、考えたことは、なぜホームレスという過酷な生き方をしなければいけなかったのか、何が原因であったのか、なぜホームレスを止めることができないのかという漠然でしかも、ホームレスとなった方に原因があるかのような視点しか浮かんでこなかったのが現状でした。

そのような考え方を抱きつつ、筑豊ブロック内の協力員で、ホームレスが多い地域を選定したところ「北九州市」に決定。その中で、ノウハウのない私たちは、北九州市社協へ（申し訳ない）手がかりを求めての全面的なご協力とご支援をいただきホームレス支援の研修会を進めていくことになりました。

①ホームレス支援をする方のお話

北九州市内にNPO法人北九州ホームレス支援機構という歴史のあるホームレス支援団体の常務理事 森松長生氏より①ホームレスのイメージ、②なぜ、ホームレスがいるのか、③ハウスレスではなくホームレス、④ホームレスとの出会いから、という4本柱のお話をいただきました。



ホームレスのイメージ（怠け者、怖い、自業自得）というものは、それを取り巻く者が作ってきたことが大きく、ホームレスの事情や現状も多くの人が知らないでいることもあるようです。例えば、ホームレスは怖い、人を襲うのではないかというイメージがありますが、逆に住民から襲われるケースが多いということからも現状がわかるかもしれません。

ホームレスになっていく原因は様々で、いったんホームレスとなってしまうと、住所が無いためにハローワークにも行けず、働く機会 選択肢も減少することなど多くの事情を抱える人達がそれぞれの原因によって自立を阻害されていることも分かりました。

ホームレスの方々は、好きで気ままな生活をしているのではなく、そこには現状の日本の社会構造と行政の制度の谷間

で、生きていかなければならない事情があり、できれば自立した生活をしたという方々が多いとのことでした。

しかしながら、やっと家を見つけ働く場を見つけ自立したように見えても、完全に「自立」できたわけではなくて、社会と関係を築けない「孤立」では解決とはならないということも分かりました。

②ホームレス問題を担当する方のお話

北九州保健福祉局 保護課の朝日奈孝彦氏より、ホームレス自立支援実施計画、自立支援センター等の取り組み、及び内容を説明していただきました。

支援機構は、88年から公園での炊き出しや住宅確保など弱者に寄り添う活動を続けていたが、当時、市のホームレス対策は無いも同然でした。

炊き出しに並ぶ人が457人と過去最高になった04年、市と支援機構は歩み寄り、官民共同のホームレス支援に乗り出します。共同で自立支援センターを開き、一人ずつプログラムをつくり、指導員が細かく生活相談に応じ、職業訓練をした結果、炊き出しに並ぶ人は06年300人を切りました。これまでに自立し職住を得た人は400人を超えることが分かりました。

③ホームレスから自立した方のお話

実際に数年前までホームレスとして



生活していた方が、どのようにして自立（社会復帰）したのかを3人の方に話して頂きました。

みんないろいろな事情でホームレスになっていますが、3人も自立しようとして一生涯懸命仕事を探したものの、年齢や家が無い等の理由でなかなか見つからず、毎日食べていくためにダンボール、空き缶などを「集めては売る、集めては売る」を繰り返したが、1回に400円〜600円ぐらいにしかならないので2〜3日に1回の割合でした。か、まともな食事ができない状況でした。また何日も食べない日が続き、食べ物があるときはまともな食いをする生活をするため糖尿病の方も多く、病気になっても病院に行けず、炊き出しの時の薬は本当に助かったと言っていました。

今では、自立支援センターから退所

- グリッド（見えない線で方眼紙みたいなもの）をしっかりとる。例えば、本文とキャプションとの間が12ミリなら全部それに合わせていく。違和感がある紙面はグリッドがずれている場合がある。
- ジャンプ率（写真の大小の差）を活用。小さいと落ち着いた紙面に、高いと主題が明確になり、小さいのがアクセントにもなる。
- ホワイトスペースを作ってみる。たくさんの記事や文字が入ると読む気がなくなる場合もある。
- レイアウトを先にする。配置がわかると写真の取り方が上手くなる。
- 配色辞典を利用する。黒もパーセンテージで20色ぐらいになる。
- 読者の目線に合わせる。目の動きにストレスを与えないように。
- 書き出しの3行に気をつける。
- 文章は3倍も4倍も書く。そして削る。その作業は面倒ですが良い文章になる。
- 見出し文、リード文は、心にストンと落とされる言葉を大事にする。
- 紙面に合わせた文字の選定をする。
- 実話、実生活から入る。制度や難しい話に入りやすい。
- 写真を活かす。モノクロからカラーへの憧れか、色を使いたくなるが写真を殺さないように。

真を殺さないように。
○写真は至近距離で撮る。自然で一体感がある写真を撮る。空気や臨場感が伝わる。

○背景を被写体に合わせるのが大事。
(被写体がある場合)

○なるべく多くシャッターを切る。右向き、左向き、上下とアングルを変えてすると良い。

○勢いや情熱を大切に。

■まとめ

地職連研修で初めて「広報」をテーマにしたので今回の研修は良いキッカケになったと思います。

研修参加の呼びかけに対して、各社協の反応もよく、アンケート記述も多いことから実際に悩んでいる方も多いので、この研修会で終わりでなく、地域住民への「広報広聴」がどう自分の住んでいる地域を変えていく大事な手法になるのか。今後も地域福祉活動の推進へと繋がる部分に踏み込んだ広報研修を続けて欲しいと思います。



4 「当事者の課題」から「地域の課題」という事をホームレス支援の体験を通してみんなで考える研修会

～少数者？多数者？どちら側から課題へアプローチするのか？～



世の中の中の景気低迷や生活スタイルの変容により「ホームレス」が年々増加しています。そこでは、いわゆる住民票を持つ市民側の言い分と、やむなくホームレスとなった側の言い分、そしてそれを取り巻く、行政やボランティアNPOなどのいろんな見方が存在します。

そこで本研修では、この問題を多角的視点で見つめ、この問題を何とか解決していこうとする方々やその方々が行う活動に参加することで、「当事者の課題」と「地域の課題」ということを考えるため1月19日(金)、22社協37人の参加で本研修会が開催されました。

(報告/行橋市社協 有永健治)

―はじめに―

社協は、地域福祉、言い換えれば「地域で安心して暮らせるまちづくり」を積極的に進めています。またそれが当たり前であり、そのような仕事をしてきたと自負されている

職員は少なくはないでしょう。

ところが、ホームレスの現状や課題、支援にいたっては、積極的に取り組んでいる社協はいっただいどれ位あるでしょうか。

多くの場合、決して清潔とはいえない風貌で徒歩あるいは自転車で各自自治体を通過している姿を見るか、少しの間滞在し、知らない間に居なくなっていたなど、あまり良いイメージではなく、福岡市や北九州市にかなりの数のホームレスが居るよねといった程度の認識ではないでしょうか。

そういった状況の中、社協がホームレス支援を考えることは、初めてに近いと言っても言いすぎではありません。

最後に元大阪市社協職員の竹村さんが言われた「地域へアプローチするには、NPOなどと関わりを持ち、情報を得て、新しい課題に向かい、自分を高め広げ深めていくことが必要だ」という言葉が印象的でした。

この研修で感じたことを、学びだけで終わらせるのではなく、実践につなげていきたいと思えます。



**全国社協職員をつどいに参加して
福岡市早良区社会福祉協議会**

白石 美和

私は人材育成に焦点をあてた分科会に参加しました。これは7分科会の中でもっとも参加者の多い分科会で、社協の組織内部の強化への関心の強さが感じられました。

大阪府社協ではコミュニティワークのスーパーバイザー養成のための研修プログラムを開発されているそうです。

今回はこの研修プログラムに携わっている先生の講義、実際に職場内研修に取り組んでいる社協の方の発表、各社協で職場内研修を行う場合のプランニングのグループワークという構成でした。

みなさんのお話を聞いてみると、各個人の業務が多忙で、他の職員とのコミュニケーションが十分にとれていない社協の課題を地域全体の課題としてとらえることを実践していく組織ですので、そこで働く職員を孤立させては本末転倒です。各職員が抱える問題をケース検討会という形で共有化し、話し合うことでお互いの力を高めていく研修にもなることあらためて感じました。



「第13回全国社協職員をつどい」に

参加して

福岡市城南区社会福祉協議会

田中 勇介

今回初めて全国規模の研修会に参加させていただきました。充実した内容であったという間に二日間が過ぎました。

今回のつどいは7分科会あり、そのなかで私は、第2分科会に参加しました。この分科会は、「社協の広報戦略を科学する」というテーマで、新聞社、国際メンターシップ協会の方を講師に招き、伝え方、魅せ方をそして、他社協からの事例を学びました。

その中で特に印象に残っているのは、講師の方が共通して言われていた「伝える(広報)ことは、ラブレターを書くようなこと」という一言です。誰かに、気持ちを伝えたい、自分の事を好きになっしてほしいと思うように、地域の方にも、その気持ちで社協の良さや事業を伝えていく事の重要性、心構えを改めて気づかされました。これは、広報誌だけではなく住民を対象にした研修会など様々な場面にも、あてはまることだと思います。伝えることの大切さや、楽しさを学ぶことができ、大変勉強になりました。「住民に恋する社協」に少しでも近づけるように頑張っていきたいと思えます。

第13回全国社協職員をつどい報告

那珂川町社会福祉協議会

升本 好昭

去る、2月10、11日に大阪で行われた「第13回全国社協職員をつどい」に参加しました。

北は北海道から南は長崎と、26都道府県約220人の参加があり、会場は熱い熱気とテンポの良い関西弁が飛び交う独特な雰囲気の中が始まりました。

基調講演 分科会では、話の端々に笑いを織り交ぜながらも「社協職員は住民生活者としての目線を持ってほしい。」「住民にとって来やすい社協になっっているのか?」「住民にわかりやすい言葉で福祉を語っているのか?」「目的 目標をちゃんと住民と共有できているか?」など、住民主体をどのように



し自立した生活を送っている3人は、いきいきとした顔で話されていました。

④現場実習

(炊き出し パトロール)



勝山公園で待っていると、テント 弁当 みそ汁 カイロ 果物 薬 毛布 防寒着を積んだ車が4、5台来ました。ボランティアの方たちが車から凄い勢いで品物を下ろし、テントを建て、弁当を配布できる準備をします。そのボランティアの中には元ホームレスの方が恩返しでやっている人もいました。準備を進めていると徐々に、弁当等を求め集まり、配布できる準備が出来たときには、70人〜80人の列ができていました。

いよいよ配布。受け取るとすぐに食

べる人、持って帰って食べる人、様々でした。温かい弁当を受け取る人に支援機構の方が「どこで野宿してるの」と尋ねると目を合わせない人もいました。別のホームレスの男性は、「あいつらには家があるんだよ」と言っていました。家があるのに炊き出しに並ぶ人を「ニアホームレス」と呼びます。極端に所得の低いホームレス予備軍という意味です。その後、弁当などを車に積み込み、勝山公園まで来れない人へ配りました。小倉駅、戸畑、八幡、若松、門司のコースに分かれ弁当を配りながら安否の確認もしていました。

⑤感想

研修が終わり、社協として何が出来たのかを考えた時、実際ホームレスをしている方を自立へと支援するのも大切であるが、ホームレスになるかならないかの境にある方が地域にはいると思う。そのようなニアホームレスの方を早めに発見しホームレスへの入口をふさぐ事も大切ではないかと思いました。

その為にも社協職員として、地域の至る所に目を向け、一人も見逃すことなく、地域住民と一緒に地域での助け合い、ネットワーク活動に、もっともっと力を入れていかないといけないなと思いました。

全国社協職員の集い

★報告

2月11日、12日の2日間、大阪で、全国社協職員の集いが開催されました。福岡県からも数名参加がありましたので、その感想を紹介します。



「第13回全国社協職員のつどい」に

参加して(感想)

福岡市中央区社会福祉協議会

武藤 正憲

「大阪の小地域福祉活動における現状と社協職員の地域へのアプローチの仕方について学び、研修後、担当校区社協で活かしていきたい」という思いで、2日間の研修会に参加しました。

この研修会は、同志社大学教授の上野

谷先生の基調講演に始まり、パネルトーク、分科会という流れで行われました。その中で、私が印象に残ったことを紹介します。

私が参加した第7分科会では、大阪市大正区泉尾北地域(人口約7,000人)における社協活動の取り組みについて野口社協会長より事例報告がありました。

この地域では、安否確認を目的とした配食サービスを行うNPO法人を、地域社協が中心となり立ち上げ、スーパーへの買い物代行などを有償ボランティアで活動するといった新しい活動の展開がなされていました。活動の中で、今まで地域に関わりのなかった人もボランティアとして参加するなど、活動者の人材発掘にもつながっていました。

また、会長の話の端々に社協ワーカーの名前が出ており、しっかりと地域に黒子として関わっていることを感じました。

インタビュー

「カー仲間」の体験記

少し分かった 地域に出ると、住民の方々と関わりを持つことの大切さ

／渡邊伸也さん（鞍手町社協）



私は社協に入って4年目の半人前
「カー」です。社協活動の中で日々、疑
問や悩みと格闘しています。またこの
記事掲載のお話があったときには、正
直びつくりしました。何で自分か…。こ
んな半人前が何を伝ええるのかと
思いましたが、皆さんに私の名前を覚
えていただく絶好のチャンスだと思っ
て引き受けました。この内容が掲載の
意図に沿うものかどうかは半ば疑問で
すが、自分の言葉で今の正直な気持ち
をお伝えしてみようかと思えます。私
の記事を読まれて「意見やアドバイス
がありましたら、どうぞ鞍手町社協ま
でご連絡をお願いします。

◆今の自分を振り返ると…
まだ18年度は終っていませんが、少
し今の自分を振り返ってみようかと思
います。今年はいれまで、面識がな
かった方とお知り合いになることもでき
ましたし、新たな取組みにもチャレンジ
しました。社協活動の中で日々、疑
問や悩みと格闘しています。また「障が
いがある方々と集まれる場所をつくりた
い」とこれまであまり口にするところな
かったまちづくりへの思いを熱く語り合
うこともありました。やりたいことは、
山ほどあります。地職連の研修や他社協
の「カー」さんからいただいた事業の資
料を見るたびに「すごいなと思いますし、
同時にこのまちで、やってやろ」という
気持ちで一杯になります。
実は、最近新たな課題にぶつかって
います。そこから出てきた課題をきき
ちんとプランニングしていますか。」と
いう指摘を受けました。また、関係性を
築いている方々に対しても「単なるお友
達ではなくて、まちづくりを共に進めて
いく仲間だ」という視点が大切である」と
教えていただきました。

◆地域に出て課題を知る

◆地域は知らない事だらけ
私が担当している事業の次年度計画に
ついて考えているときのことです。これ
まで感じたことと進めてきたことをもと
に計画を立てましたが、ある程度しか見
えてきません。どうしてもつながらない
のです。ねらいや内容を考えれば考える
ほど、本当にこれで良いものかと悩みま
した。
そこで、知恵をお借りしようとする方
に相談してみました。
今考えていることを全てお話しした後に
「あなたはきちんと地域と関係性を持つ
ていますか。そこから出てきた課題をき
ちんとプランニングしていますか。」と
いって少し書いてみたいと思います。

◆地域に答えがある
初めから地域へ飛び込むことは容易
ではない。上手くいかないことは充
分にわかっています。何で地域に出
ることも大切なかを考えることがで
きました。また、これまで関係を築い
てきた方々に対しても、きちんと話を
聞くことができたのか、訴えや思いを
大切に受け止めていたのかを問い直す
良い機会でした。
「地域に答えがある」という意味が少
し分かったような気がします。何も知
らなかつた地域へ飛び込んで、課題を
探り、そのアプローチが前進したとき
に初めて題名にも挙げていますが、地
域に出ると、住民の方々と関わりを
持つことが、分かったと言ってみた
と思います。

左奥の男性が渡辺さん。写真は、高次脳機能障害
のグループでのクリスマスケーキ作りの一幕。

支えていくのか?と社協の本質を改めて問われているようでした。そして、私にとっては「できているか?」と日々の業務を振り返る良い機会であったことは勿論のこと、話の中にこれからの業務を担っていくうえでのヒントをたくさん得ることができた講演 分科会でした。

また、懇親会では、恒例?の名刺交換をしていくなか、「福祉を外から変えていきたい!」と社協を退職し、4月の地方統一選挙に出馬されるという方と話をさせていただき、その地域、福祉にかける熱い思いに大いに刺激を受けました。

初めてこのようなつどいに参加して、ありきたりかも知れませんが、いろいろな人との出会い、情報交換できたことはもちろん「良かった」と感じたことです。が、何よりも分科会でも、懇親会でも同じように話をしていくうちに、だんだん熱っぽく、話が止まらない講師、そしてワーカーさんが多く、その話を聴いているとなぜか元気になる、「頑張ろう」という気になる、そんな魅力のあるつどいでした。

「第13回全国社協職員をつどい」

に参加して

北九州市社会福祉協議会
大磯 憲一

全国社協職員をつどいに参加した感想文を作成して欲しいという依頼を受けて、申し込みをしたところからどくどくと作っていました。あまりにも膨大な量になってしまいました。それで、焦点を絞って、中でもとても感動した交流会について述べたいと思います。

交流会会場の受付で、ビンゴのカードというところで、縦5つ横5つ計25マスの枠が記されている用紙を渡されました。その用紙、参加者同士交流をしながら、そのまですに名前を書いてもらうというものでした。

普通のビンゴなら数字を読み上げるところを主催者が参加者の名前を読み上げて、縦横 かなめ3つが揃えばビンゴというものでした。なるほど、これだと絶対に交流をしなければビンゴに参加できないので、参加者同士の交流を促進するには、もってこいの方法。どこかでこの手法を使えないかなあと思いながら、とにかく多くの方に自己紹介をして、ビンゴの用紙に名前を書いてもらいました。

事前に、名刺をいっぱい持ってきてく

ださいとあったが、かなりの数を配りました。いただいた名刺もかなりの数になりました。(当然、名刺ホルダーに整理をして職場に置いていきます。何か情報を聞きたい時のために。)

ただ、25人の方に次々と交流するといふのも難しく(自分の手際が悪いのもあるのですが)、まず目全部を埋めることはできませんでした。しかしながら、運よく、埋まったまです目だけで、ビンゴにソックスをいただきました。(福岡の次に大阪が好きです。)

交流会のアトラクションとして、第5分科会『住民主体の社協とかけて「個別支援」と説く そのココロは?』で行われた主催者によるロールプレイング?も披露されました。予定してはいなかったようでしたが、実際に第5分科会でやったところ、とてもうけたので、交流会でもということになったようでした。このロールプレイングは、コント仕立てで、とても素人とは思えないほど、絶妙に上手でした。「ひよっとしてこのふたりは、元芸能人?」また、うしろの人も見えるようにと自然発生的に前の人 が座っていくという気遣いにもとても感動しました。

たかさんの方からいただいた名刺、ビンゴで当たったTシャツとソックス、そ

して、交流会での感動(社協職員の情報熱に対するものももちろんあります。)を携えて、宿泊先に向かいました。福岡に帰ってからもしばらくは、興奮が冷めやらぬままでした。また、職場で同僚にこの感動を話しました。(感動が伝わったかどうかはありますが…)。自主的に参加したつどいではあります。が、時間が許せば、また、来年度実施されるつどいにも参加したいと思いました。

上記のとおり述べましたが、このような感激や他の社協職員の情報熱は、実際に体験しないとわからないと思います。ぜひ、幅広く他の市区町村社協の職員ともこのような機会を捉えて、交流を試みることをおすすめします。



★地職連からのお知らせ★

本号のまなこでは、今年度行った研修事業を特集しました。福岡県地域福祉活動職員連絡会では、来年度も継続した研修を行いたいと思っています。

そのためには、県内の専門員の皆さんが今どんな課題を抱えているか、どのようなことを学びたいかを踏まえた上で、研修をうちたいと思いますので、「こんな研修会がしたい」という意見をお寄せ下さい。

例

- 新人ワーカーのための社協の基本的なことを学ぶ研修
- 地域の課題を探り、証拠をつくる社会福祉調査を学ぶ研修
- 行政 社会などへのソーシャルアクションを学ぶ研修
- 引きこもり 登校拒否などこれまで社協があまり関わらなかった新しい福祉課題へのアプローチ研修 等

また、来年度の研修の開催についても、各ブロックの担当割りによって実施したいと思っておりますので、「理解とご協力をよろしくお願いいたします」。

〈地職連事務局〉

〒839-1306
福岡県うきは市吉井町新治372
うきは市社会福祉協議会内
TEL 0943 76 3977
FAX 0943 76 4329

《編集者のつづき》

今回のまなこの編集をK武会長に依頼され、予定より若干遅れましたが、発行することができました。せっかくだので、私の今の課題を紹介します。

昨年末あるお母さんからの相談です。「私の子は脳性マヒの障害児。でも保育園に通うようになってお友達に刺激を受け、どんどん成長しているのです。『お友達と同じようにしたい、遊びたい』そう思っているようです。来年度から小学生。私はこの子を地域の小学校に通わせるつもりです。そして、小学校の放課後も、お友達と過ごせる時間がほしいので、学童保育に通わせたいので、ボランティアの方に協力をいただけないでしょうか」というもの。

親としては当たり前の気持ちですが、学童保育に通ってほしいと思いましたが、ところで、私の市にある学童保育はほぼ民設民営でつくられており、指導員の先生は安い給料 少ないスタッフで働

き、厳しい職場環境で頑張っておられます。この子が通うことになる学童保育も同様で、「ぜひ学童保育に来てほしい」という思いは強く持つてはおられるものの、現実的に今のスタッフだけでは安全面などを考えると受入れることは難しい、ということでした。

私の市では障害児が通うようになると、年間約35万円が障害児加算として行政から補助金が出るようになっていきます。ですが、単純にこれを人件費に使ったとして1年間をこれだけでまかなえるかというところ、それは無理な話。お母さんはこのあたりの事情も踏まえたところで、ボランティアでの対応を希望されています。

今ボランティアを探しています。「障害があるから学童保育に通えなかった」というのはおかしな話。こんな状況は絶対避けたいと思っておりますし、何より子どもに我慢をさせたくありませんから。でもボランティアをお願いすることが本当の解決ではなく、公的な責任で子ども放課後を保障してほしいと思っております。

「権利の拡大」「少数者の立場に立つて……の言葉を忘れずに、お母さんと子どもに思いを寄り添い、取り組んでいきたいと思っています。」 (U) (Y)

<発行者> 福岡県地域福祉活動職員連絡会
 <事務局> 〒839-1306 福岡県うきは市吉井町新治372
 うきは市社会福祉協議会内
 TEL // 0943-76-3977
 FAX // 0943-76-4329
 E-mail // info@ukiha-shakyo.or.jp